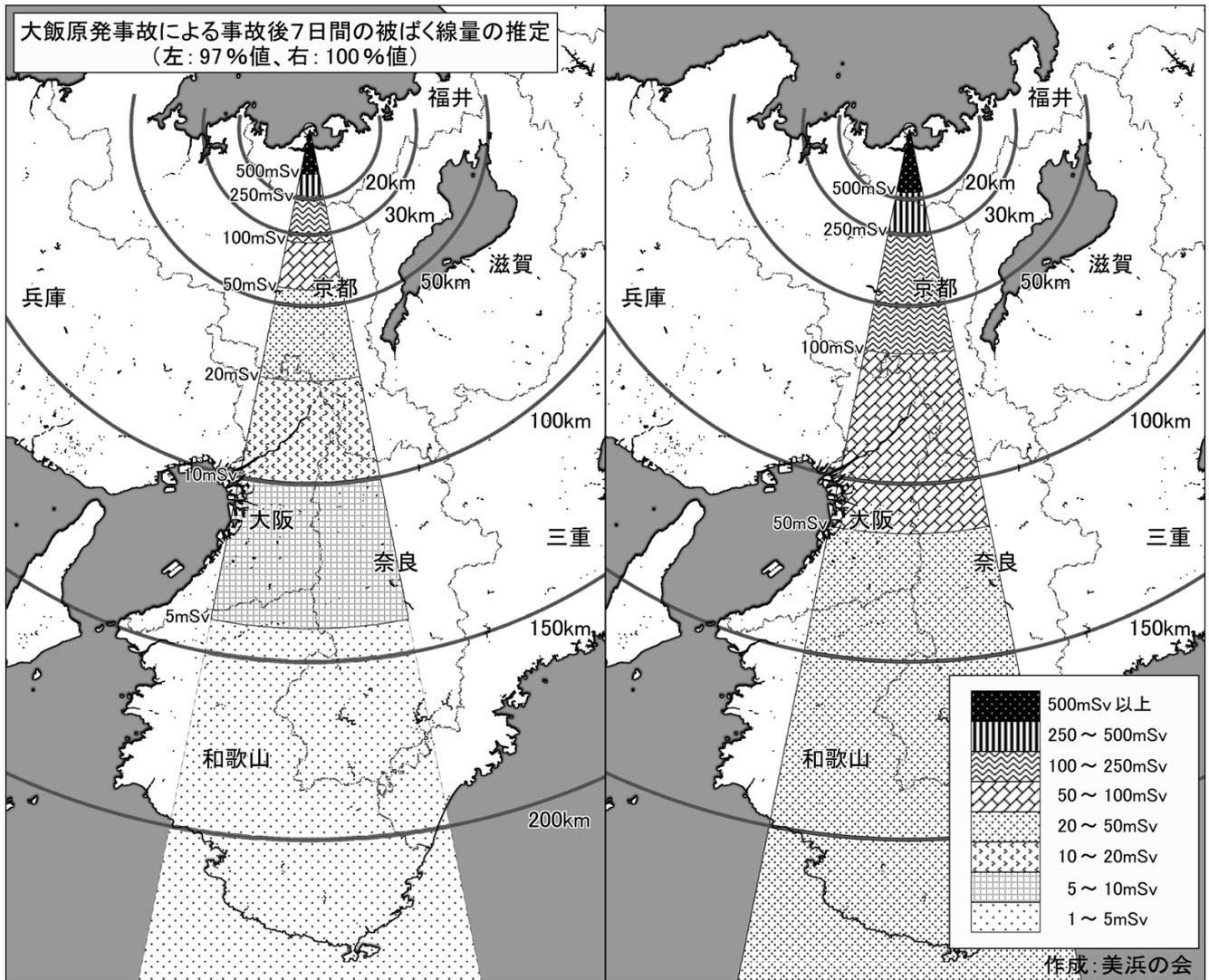


原子力規制委員会の被ばく予測は過小評価

◆ 7日間の被ばく線量の予測は、本当はもっと深刻です

大飯原発で事故が起これば・・・	(100%値の場合)
20 ^{km} 圏の若狭地方	→ 500ミリシーベルト以上
30 ^{km} の京都北部	→ 250ミリシーベルト以上
50 ^{km} の京都・滋賀	→ 100ミリシーベルト以上
100 ^{km} の大阪・奈良	→ 50ミリシーベルト以上
200 ^{km} の和歌山	→ 20ミリシーベルト以上



※原子力規制委員会が2012年10月24日に公表した拡散シミュレーション(12月13日総点検版)に基づいて計算した(放射能の放出量は各方位ごとに全量放出となっている)。事故発生時の風向きは主として南方向に吹いていた場合を想定し、事故後7日間に受ける累積の実効線量を示している。外部被ばくおよび吸入による被ばくのみが想定されており、汚染された水や食物等からの内部被ばくは考慮されていない。

規制委は、1時間ごとの気象データ1年分について、24時間×365日=8760個の計算を行い、そのうち、最も被ばく線量が高くなるものから、上位3%、263個分の計算結果を切り捨て、264番目の値を採用するという操作を行っている。このため、規制委は自分達の推定値を「97%値」と呼んでいる。しかし、被ばく防護の観点に立てば、安全側(保守側)に立ち、最大値を採用すべきである。本図は、計算上最大となる値、つまり「100%値」を計算しなおして示したものである。また、規制委は、16分の1円の区域の幅で平均した値を示しており、その点は本図も同じである。扇形区域の中心付近では、その平均値の5倍以上の線量となる(2012.12.23改訂版)。

原発事故を繰り返さないためには、運転停止しかありません